論　文

エントレインメントは身体が整うことにより表象される「心のダンス」

七木田　方　美

１．はじめに

生後間もなくの乳児が大人の表情や口の動きを「模倣」することや、２か月を過ぎる頃には、喃語とは明らかに違う音声で、大人の音声をまねることが知られている。その場面に遭遇した者は、誰でも心躍るような歓びに満ち浸される。

この乳児のまねるという「模倣」は、意図した模倣ではなく「エントレインメント（共鳴動作）」である。意図の介入のないまま反射的に自動的に生じてしまうものであり、遠隔よりも対面で生じやすく、陽性感情において生じやすいとされている。また、エントレインメントは、他者や周囲の環境を感じ取り、それにあわせて自己調整をするというコミュニケーションの原型となる機能と考えられている。このことについては、和顔愛語第47巻（2018）にて説明したので参照してほしい[1)]。

２．研究方法

本稿では、エントレインメントの様相が、姿勢の発達とともに変化していくことを、比治山大学短期大学部キッズサポートシステムkissの、０歳児とその保護者を対象とした「タッチ＆プレイルーム」等で得られた親子の姿をもとに、エピソードと写真を用いて説明を試みる。

３．姿勢の発達とエントレインメント

⑴　首すわりのころ

子どもの咽頭の位置は通常、新生児で第４頸椎、６歳児で第５頸椎上縁にあり、思春期から成人期にかけては第６頸椎の近くに位置する。子どもの咽頭は小さく喉頭蓋に近く柔らかい

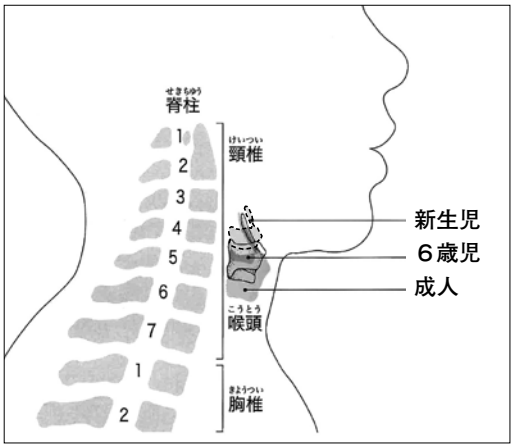

図１　子どもの喉頭の位置の変化
『こどもの病気の地図帳』講談社（2002）より
一部改変

（図１）。また、咽頭と喉頭は気道の入り口にあり、食事の飲み下しや発声にも関与している。適度に閉じられた声門を呼気が通過するときに声帯が振動し、発声が可能となる[2)]。「呼吸と栄養摂取を両立させるためにも、まずは発声の問題はあとまわしにおかれたというのが実情に近いだろう」[3)]と正高が述べるように、咽頭の位置が高いと、呼吸をしながらミルクを飲むことができるが、発声はしにくい構造になっているのである。すなわち、生まれて間もなくは、表情のエントレインメントはできるが、音声エントレインメントは喉の構造上、どうしてもうまくできないのである。

⑵　首すわりの頃にはじまる音声エントレインメント

写真１は乳児の首がすわった３か月になる頃、傍に父親がいるという安心感のもと、初めて母親が乳児をベビーカーに乗せる練習を、家の中でしたときの写真である。

母親は、我が子がベビーカーに収まってくれたことに安堵し、「いいねえ…いいねえ…」と、無意識に「マザリーズ」の特徴を持つ声で繰返し語り掛けていた。傍にいる父親は、母と子が夢中になって声を重ね合わせ、まるで社交ダンスをするように声を掛け合う母子の姿がおもしろく、たまたま手にしていたカメラで写真を撮ったという。また、母親は、父親が写真を撮っていることに少しも気づかずにいたという。母子が守られ、安心しきっていた証拠であろう。

写真１

乳児はベビーカーによって背面が安定した座位姿勢となった。乳児は母親の表情が正面に見えるという、今までとは異なる景色を経験した。目の前の母親はうれしさと安堵感のこもった表情と声だったので、乳児はそれにつられて身体をもぞもぞと動かしていた。その後、乳児はよく動く母親の目と口元を凝視すると、動きが止まり、母親の口元の動きに合わせるように自分の口を動かし、母親の「いいねえ」のリズムと抑揚に重ねるように「アーア」（母音）と発声を繰り返した。これが音声エントレインメントである。

この出来事はベビーカーに座って30秒間ほど生じていた。このあとすぐに、母親が「意識して」同じように声をかけてみたが、「もう一度

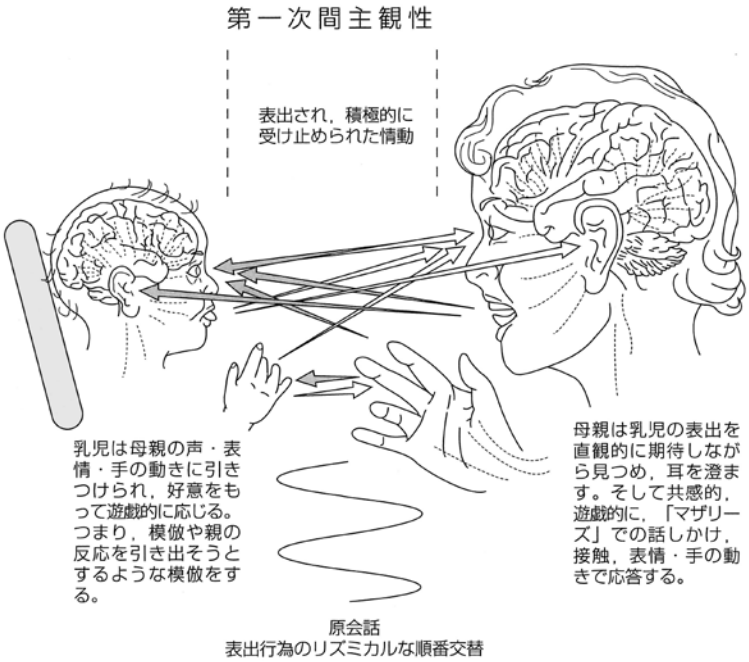

図２　母親と2か月児との初期コミュニケーション
『自閉症の子どもたち　間主観性の発達心理学からのアプローチ　第２版』ミネルヴァ書房（2006）より引用

同じように声を出してほしい」と思うほどに、音声エントレインメントは生じなかったという。母親が意識するほどに、同じように出しているはずのマザリーズは、母親から乳児への声のベクトルが強くなり、乳児にとっては侵襲的になっていたのだろう。「マザリーズ」については、本冊子の用語説明で詳しく述べているので参照してほしい[4)]。

図２は母親と２か月児の初期のコミュニケーションをトレヴァーセンらが図式化したものである。写真１のベビーカーに乗って音声エントレインメントをしている親子の写真の構図とそっくりなことが、見比べるとわかるだろう。

図には次のように説明がある。「この頃は、第一次主観性、直接対人交渉である。リズミックな原会話が相手と相互作用して会話となる。母親が話しかけると乳児はアイコンタクトを求め、母親の発話のメロディにあわせて体を動かし、応える（Early communication, between a mother and a two-month-old. This is the period of Primary Intersubjectivity, or person-to-person interaction. Rhythmic protoconversations set up the companionship on which the child's future learning in conpanionship will be buillt.）[5, 6)]。これは、浜田の「人間は、意識（意図）でもって行動を決定しているかのように思っていますが、実際にはそれ以前に身体の方が先に動きだしています。共鳴動作（エントレインメント）においては自分と相手とがいわば一体化しています」[7)]という論説と同じである。

⑶　背面が安定し、リラックスした場面で生じるエントレインメント

乳児とその保護者を対象としたクラス（タッチ＆プレイルーム）が終わり、母親が背面の安定した抱っこひもの中にすっぽりと乳児をおさめ、帰りの挨拶をスタッフやママ友としているときにも、乳児の音声エントレインメントがしばしば見られる。

乳児は母親を見上げるように対面になっているだけでなく、抱っこひもの中にいるため周囲が気にならない状況で、母親と身体を密着させているという特徴がある。そして母親が場に慣れリラックスしているという特徴もある。さらに興味深いのは、帰り際に始まった抱っこひもの中での音声エントレインメントが終わると、多くの乳児が寝ぐずりをはじめたり、眠りについたりすることが非常に多いということである。

さらに、寝返りができそうな頃になると、乳児の背面が安定する姿勢（膝に抱かれる・床面に寝転ぶなど）で、母親の顔を見上げる状態にいると、母親が別の母親と楽しくおしゃべりをしているときに乳児の音声エントレインメントが生じることがある。乳児は、まるで母親の楽しそうなおしゃべりに自分も参加しているかのように発声するのである。

膝に抱かれる、床面に寝転ぶといった、母親の表情が見えるほどの状態で、乳児が母親から感覚器を通して受け取るものは、母親の口や目などを含む顔の動きや手の動きだけではない。実際にその場に寝転んでみると膝や床面から声の振動が伝わってくることがわかる。乳児は対面でなくとも、話し手の口の動きや目の動きを注視してその場の雰囲気を感じ取り、声という振動を、自分の身体が接触する母親の膝や床面から感じ取り、音声のエントレインメントをするのだろう。

したがって、首がすわる頃に音声エントレインメントが生じる条件は、姿勢が安定するように縦に抱かれていること、乳児を抱いている大人（多くは母親）も、乳児もリラックスしていていること、乳児の視界の中にいる大人（多くは母親）が、声も表情も楽しそうにしていることである。

寝返りができそうなほどに首が安定する頃には、乳児は対面で直接語りかけられなくても、声の振動を感じられれば音声エントレインメントができるようになると考えられる。

⑷　座位が安定すると顔が見えない状態でもエントレインメントが生じる

お座りの姿勢が安定する頃（７か月頃）にな

写真２－１

写真２－２

ると非対面でもエントレインメントが生じる。

写真２－１と２－２は、乳児の親子クラスの最後に、支援者が絵本の読み聞かせをしているときの親子のようすを著者が撮った写真である。８か月の乳児は、母親の膝に抱かれて身体を母親にゆだねており、母親と同様に絵本を読み聞かせている支援者の方向を見ていた。母親の表情は口元しか写っていないが、母親と、母親の膝に抱かれている乳児の表情も気分も一体化していることが、写真から読み取れる。

絵本の読み手は５メートルほど離れていた場所にいた保育士であった。読み手は穏やかな読み方をしていた。絵本から伝わる喜怒哀楽を、母親が先に感じ取るのか、乳児が先に感じ取るのか、この写真から分析するには限界がある。しかし絵本や読み手から受け取った多様な感情を、母親と乳児が互いの身体の状態で伝えあっていることは想像できる。例えば怖い時には身体は緊張し、楽しい時には緩むといった身体の状態は、身体を密着させるほどに伝わるものである。乳児は多様な感情を母親の膝や身体のようすから感じ取り、感情を分化させていくのだろう。

⑸　共同注意が向けられるころ

写真３－１を見てほしい。９か月を過ぎ、共同注意が向けられるようになった１歳頃、母親が慣れ親しんでいる介助者（著者）と、はじめて食事をしている場面を、テーブルを挟んだ斜め方向に座っていた母親が、写真に撮ったものである。そして、母親が著者にこの写真をプレゼントしてくれなければ気づかなかった子どものようすであった。

著者は、このとき、離乳食専用スプーンでうどんをすくうことに四苦八苦していた。そして膝にいる子どもは、介助者である著者の表情も、母親の表情も見ていないが、介助者と同じような気持ちになっていたことが写真のようすから読み取れる。子どもと介助者（著者）は、お互いの表情は見えないため、どちらが先にということはわからないが、「困っている」というニュアンスを感じ合い、気持ちも表情も一体化していることがわかる。そして写真３－２、３－３は、口に運ぶことができたときの、安堵と喜びのエントレインメントのようすである。困難であった「さっき」があり、安堵と喜びの「今」という感情の落差の繰り返しにより、子どもは時間の流れを知るのであろう。

写真３－１

写真３－１

写真３－１

写真２－１、２－２、３－１、３－２、３－３にまつわるエピソードから、乳児は座位が安定する頃には、エントレインメントはFace to Faceだけではなく、他者の身体の微妙な動きを通しても生じるといえるだろう。

４．エントレインメントは心のダンス

エントレインメントは生後間もなくから意図の介入のないまま反射的に自動的に生じてしまうものであり、首が座りだす頃に生じる音声エントレインメントは、安定した姿勢で身体が縦になり、リラックスできる状態にあれば可能になる。

首がすわり寝返りができそうなころになると、対面でなくとも人の楽しそうな声の中に身をゆだね、声の振動を感じ取ることができれば音声エントレインメントが生じる。

お座りが安定する月齢になれば、顔が見えずとも、身体が接触していれば生じ、「楽しい」という陽性感情だけではなく「困っている」という感情のエントレインメントも生じる。

「共鳴動作（エントレインメント）は自他の限りなき一体化のうえに成り立つ」[7]と浜田が述べたが、それに加え本稿では、乳児の姿勢の発達に伴って表出の形を変化させることを写真と写真にまつわるエピソードをもとに論述した。

乳児は身体をうまく動かすことはできないが、大人になると相手に合わせてダンスをすることができるようになる。ダンスと言うと、多くのスタイルがあるが、ここでいうダンスとは相手の動きにあわせて踊る社交ダンスのことである。社交ダンスはうまくなるほどに、お互いの動きに身体をゆだねたり、支え合ったりすることができるようになり、動きに余分な力が入らず流れるようになるという。したがって、エントレインメントは、身体が整うことにより表象される「心のダンス」と言ってもいいだろう。

最後に、「子どもにたくさん話しかけて」を「言葉のシャワーを浴びせて」と指導する保育者や保健師がいるが、それは間違っていて、本当は、抽象的ではあるが「子どもといっぱい心をダンスさせて」が正しい。

〈引用・参考文献〉

１）七木田方美：エントレインメント．和顔愛語　2018；47：15

２）斎藤真木子：上気道炎―咽頭炎，喉頭炎．鴨下重彦・柳澤正義監修．こどもの病気の地図帳．東京：講談社，2002：56－57.

３）正高信男：第３章はじめての声がわり．０歳児が言葉を獲得するとき．東京：中央公論新社，2006：54－71.

４）七木田方美：マザリーズ．和顔愛語 2021；49：44

５）トレヴァーセン，エイケンら：自閉症の子どもたち―間主観性の発達心理学からのアプローチ―第２版．中野　茂，伊藤良子，近藤清美監訳．京都．ミネルヴ書房，2006：vi.

６）Trevarthen C, Attken K, et.al.,: Children with Autism 2nd edition Diagnosis and Interventions to Meet Their Needs. Jessica kingslay Publishers London and Philadelphia, 1998:xiii.

７）浜田寿美男：第２章．模倣と表象．身体から表象へ．京都：ミネルヴァ書房，2002. 59－111.